

(仮称) みんなの劇場整備 基本構想

【基本理念抜粋版】

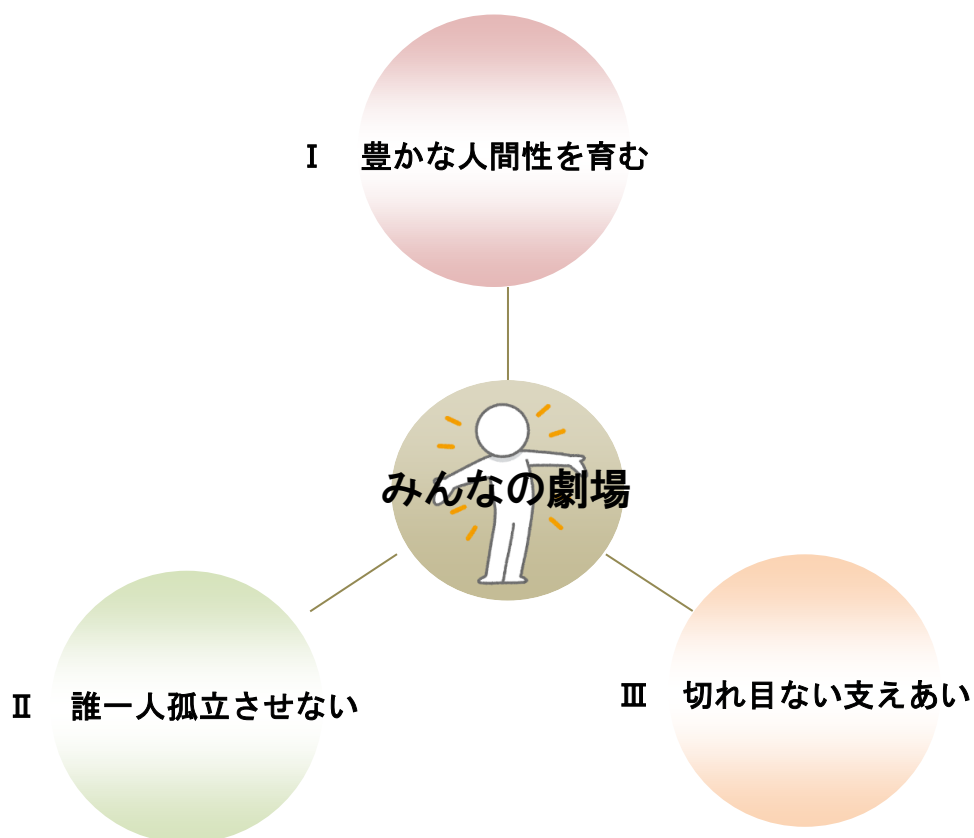


丸 亀 市

平成 30 年 12 月

1 基本理念

新しい市民会館は、文化芸術からのアプローチにより、丸亀市の様々な課題を解決に導く社会機関として、次の3つの理念を掲げ、仮称を「みんなの劇場」ということとします。



I 豊かな人間性を育む

みんなの劇場は、文化芸術の活動拠点となるだけではなく、性別や年齢、個人を取り巻く問題の大小、住んでいる地域や国籍に関わらず、全ての市民の皆さんが文化芸術に触れ、「豊かな人間性を育む」ための機会を創出します。

お母さんがお腹の中の子どもに音楽を聴かせたり、本を読むなどの胎教というものがあります。お母さんが楽しくなったり、リラックスすることで、お腹の子どももとても安心するのだそうです。

このように私達はこの世に生を受けた瞬間から、家庭に染み込んだ音楽や生まれ育った地域の踊り、祭りなどに触れながら育ちます。文化芸術は生活そのものであり、芸術は生活の中のなにげない場所にあるものです。

しかし、どんなに素晴らしい作品や表現があったとしても、それに気づく感性や経験がなければ芸術だとは感じられません。求める人の個性や、生きてきた歴史が作品や表現と出会うことで芸術的な時が紡がれるのですから、その作品や表現から受ける感性や価値は、100人いれば100通り生まれます。男女の違い、世代の違い、障がいのあるなし、住んでいる地域や国籍の違い、それら全てが個性であり、その違いが文化芸術の豊かさなのです。

文化芸術に溢れる生活を通して、私たちは色々な感情を体験し、経験したことのない出来事や異なった文化に触れることもできます。そのような心の動きを幾重にも積み重ねていくことで人の感性は時間をかけて創り上げられます。心が健やかで、相手の気持ちを思いやる、豊かな人間性を育むために様々な文化芸術に触れられる機会が全ての人に保障される必要があります。

Ⅱ 誰一人孤立させない

みんなの劇場は、心理的にも、経済的にも、劇場から一番遠くにいる人達にこそ文化芸術から生まれる様々な価値を届け、緩やかに人をつなげることで「誰一人孤立させない」社会を創る社会的な機関となります。

生まれながらにして、ハンディキャップを背負ってしまうことがあります。それは身体的なことだけではなく、精神的なものや経済的なもの、地理的なものもあります。ハンディキャップが少ない条件で生まれ育ったとしても、予期せぬ事故や災害、病気等によって心や体に不自由さが残ってしまうこともあります。また、高齢になると体に不具合が出たり、知的機能が衰えるということは、避けて通れません。

人は本当に困っている時、なかなか助けを求めることができません。そこに、人とのつながりがないと、周りが見えなくなってしまう内にこもってしまうのです。

社会的な変化に目を向けてみると、わが国は、古来より「集う」という地縁血縁型の社会の中で結束力や相互扶助、教育機能を保持してきたといえます。

しかし、戦後の高度経済成長により、国民の生活が一応の水準に至ったことで、他人に干渉されない居心地のよさに関心が向きだし、「プライバシーの尊重」という言葉が頻繁に使われるようになりました。その結果、近所付き合いも減り、近くにいても知り合う、交流する機会が少なくなってきたのです。

また、生活スタイルや価値観が変化し、核家族の中でも単身世帯が非常に多くなってきました。さらに、戦前の家督相続制度の廃止や、子供が親の面倒を見るという慣習が薄れつつある今日、高齢者の単身世帯や高齢者の夫婦のみ世帯の増加が問題となっています。

格差社会の中であって、地域と人とのつながりが弱くなってきている現代は、「助けて」といえない、簡単に孤立する社会に生きざるを得なくなったといえるかもしれません。

そんな社会だからこそ、「違いを豊かさにし、人と人をつなぐ」という文化芸術の果実

を隅々まで届けることによって、誰かが誰かとつながっている、孤立している人がいない社会を創っていく必要があります。

Ⅲ 切れ目ない支えあい

みんなの劇場は、文化芸術が持つチカラで、福祉、医療、教育をはじめ、様々な分野の課題を「横串で刺す」ことにより、「切れ目ない支えあい」ができる社会を形成する役割を担います。

少子高齢化、人口減少が原因となる問題として、年金や医療介護などにかかる「社会保障給付費」の増加があります。内閣府の「高齢社会白書」によると高齢者人口がピークになる2042年の高齢化率は約35%となっており、3人に1人は高齢者になるということが予想されています。

高齢期にさしかかると、筋力の低下等の身体的な問題だけではなく、認知機能障害やうつ等の精神的、心理的な問題、独居や経済困窮等の社会的課題等、沢山の不安要素があります。

福祉に関する様々な制度は用意されていますが、人が人として尊厳を保つ、生きがいを見いだすためには、人とのつながりの中で自分の存在を認められることが必要です。

違いが豊かさでもある文化芸術は、生活環境や価値観の違いが全て受け入れられる力があり、人とのつながりの中で、自分が認められているという生きがいを生み出します。

先進的な国では、医療機関が薬の代わりにダンスや音楽など参加するサークルを紹介することで、「社会とのつながり」を処方するという試みが広がっています。自分の居場所を発見し、自己承認欲求を満たすことで症状が緩和され医療費などが削減されたということです。

一方、国内でも、認知機能障害を持つ患者に演劇の鑑賞や読み聞かせ等を行い、脳の情動側に働きかけることにより、徘徊や妄想などの症状が改善されるという効果が報告されている事例もあります。

教育に関しては、「近頃の子どもたちはコミュニケーション能力がない、表現力が著しく低下している」といった発言が聞こえてきたり、不登校児童生徒の実態について考え

る背景として、自尊感情に乏しい、無気力、耐性がない、コミュニケーション能力が低いなどといった傾向が指摘されています。

いじめや、キレるという現象を出来る限り少なくするような人間関係を形成していく能力のみならず、社会に出てから最初に直面する世代間コミュニケーション能力、国際社会を生きていくために必要な異文化コミュニケーション能力は、これからの時代を生きる子どもたちにとって大切な能力となっていきます。

このコミュニケーション能力とは、自分の意見を一方的に伝える能力ではなく、いろいろな価値観や背景をもつ人々の集団において、お互いの関係性を深め、共感しながら、正解のない課題や経験のしたことのない問題について、合意形成や課題解決をする能力であると捉えることができます。これらは、文化芸術がもつ特性そのものだといえますし、人と人をつなげたり、自己承認欲求を満たすことも文化芸術の得意分野です。

変化し続ける社会情勢に順応するために、文化芸術を介して、色々な年齢層の人達と関わりを持ち、豊かな人間性を養い、想像力や感性を育くむことが大切です。

